
選択紙

ふじばん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

選択紙

【著者名】

ふじぱん

【ノード】

N4533D

【あらすじ】

さあさあ、よつてらつしゃい、みてらつしゃい。唐九汰屋、第2弾の商品「選択紙」です。これはなんとすごい。人が生きる上である様々な分岐がありますよね。なんとこの商品は、その分岐点まで遡る効果のある便利な道具です。つてちょっとお客さん……、何ですかその白い目は（へへへ、実際にこのツールを使った方がいるんですよ。緒方さんっていうんですね。勿論、仮の名前です。その方の体験談、とくとくご覧あれ。

携帯電話。

一昔前までは、持っているだけで珍しがられた。

しかし、今は持っていない方が珍しがられる。

例を挙げよう。

会社勤めの際、携帯持つてません。 又は、料金滞納して通話が出来なくなっています。

などと言つてしまつと、
やれ契約して来い。

やれ料金払え（こつや 当然か（笑））。

と言われ、当然ながら評価は携帯が使える状態になつていないと
うだけで下落する。

携帯を所持していない、というだけで社会人としてのマナーが無い。

そり、落胤される時代になつている。

だからこそ、彼のような男がこれから語るお話の一つになる。

あんまり長々と前置きを書くと、戻る操作をされて読みますに去られ
てしまふ可能性があるのでこの辺にしておいて…………え、

遅い？

汗

まあ、物語を始めよ。ひ。

彼の名前は……。

そう、仮に緒方君としよう。

彼が中小企業に就職し、少し経過してからの物語である。

「緒方くん、君さ……、携帯どうしたの？」

緒方の上司、神谷が聞いてきた。

「すみません、今日苦しくて……」

「だから帰まつてゐんだ……。早く料金払つて復旧しなよ」

緒方はムッとしたが、表に出さず

「はい、そうします」

と告げて仕事に戻つて行つた。

何故、緒方が携帯代を払つていなか……。

それには訳があつた。

先月、父が入院した。

父は保険に入つておらず、医療費の負担が家族にのしかかつてしまつた。

仕方ないので削れる所から削つて行こうという話になり、いの一番に上げられたのが、携帯代だつたというわけだ。

その事情を話した所で、それは自分の都合といつ事で切り捨てられるのが現代の風潮。

携帯電話普及の弊害とでも言つておこつか。

やがてこの会話が後に緒方にとってマイナスになつたのは、この時は気付かなかつた。

「緒方くん、ちょっと」

神谷に呼ばれた緒方は、神谷の席まで行つた。

「はい、なんでしょう？」

「来週の出張な……、木村くんに変わつてもひつかい

「え？」

緒方は耳を疑つた。

「連絡繋がらないんだと何かと不便だしな」

「……そりですか」

始めは些細な事であった。

やがて徐々に緒方は重要な仕事から外されていったのである。

夜……。

緒方は馴染みのバーにいた。

「おかわり……」

「緒方さん、荒れますね」

バーテンは二杯目のマティニーを緒方の前に置いた。

「お兄ちゃん、荒れますね」

緒方にいきなり声をかけて来た男がいた。

趣味の悪い赤い薔薇の柄のアロハを着た、妙に若い男。

あまり関わりたくない怪しげな男であった。

「おや、唐九汰屋さんじゃないですか。 お久しぶりです」

バーテンは怪しげな男に向かって挨拶をしていた。

ビービービービービービービー。

「ガラクタ屋?」

緒方は聞こえたまま反芻した。

「ガラクタちやう。 カラクタでつせ」

唐九汰屋は過剰に反応してきた。

「ボクは、唐九汰屋のオーナー兼、営業兼、仕入兼、事務兼売り子でつせ」

よつは全てじゃないかと思いつつも何か言つてしまつたら関わつてしまふことに成り兼ねないので、何も言わなかつた。

とてもではないが変人に構つているほど余裕は今の緒方にはない。

「緒方さん」

「...」

唐九汰屋は緒方の名前を呼んだ。

何故俺の名前を知つている?

そう思い、唐九汰屋をまじまじと見つめた。

「さつきバーテンさんに呼ばれてたでしょ？」

「どうでもいい疑問に聞いても無いのに答えてきた。

「何か？」

「相当な深酒になつてますよ。こういう場合得てして何かあつたからこうなつてる訳ですな。ボクで宜しければお話を聞いちゃいますよつて」

「いえ……特に何も？」

「関わりたくない。

緒方の感情はその一本だった。

「ううむ……。緒方さん……。一人で溜め込むより話してしまつた方がすつきりする。どつかの誰かが言つていた有名な格言ですな」

それに……と唐九汰屋は付け加える。

「実際問題、緒方さんを見る限り身内や知り合いには話しにくい内容で悩んでいるようです。ボクなぞ、今日たまたまこの場で知遇を得た赤の他人……。今日はここで親しげに対話しておりますが、夜が開けたら他人。緒方さんの悩みを吐き出すには恰好の物件だと思いますが？」

「…………」

「…………」

一理あるな……。
と緒方は思つていた。

だが緒方の抱える悩みは他人に取つて取るに足らない悩みである。

身内や知人に話せないのに赤の他人に話せる内容ではない。

緒方はそう結論付け曖昧に微笑んだ。

「身内や知人に話せないのに赤の他人に話せる内容ではない。といった所ですかね？」

「こいつ、心の中を読めるのか？」

若干疑心暗鬼に陥つていた。

「いや、ボクの経験上の話ですよって……。 読心術を心得ているわけではないです」

「経験上?」

「はい……。 ボクの運営する唐九汰屋はある意味ではなんでも屋でござりますから」

「なんでも?」

「探偵紛いな事から、悩み相談などなど……。 そっち方面ばかりですが、そっち方面をやっているからこそ守秘義務を生業としてあります。 ようは口が堅いって事ですしね」

「…………一時期な」

「はい?」

「一時期、やむを得ない理由で携帯電話の料金を滞納したんだよ……」

「まひ」

「そこからかな……。俺の人生の歯車が狂い始めたのは……」

「…………」

「個人的には些細な事のつもりだったんだがな……。会社はそんな俺を信用の置けない者としての落胤を押しやがった……。順風満円とは言えないが、それが起こる前はそこそこの仕事を任されていたんだがな……。今では俗に言う窓際族の扱いというかな……。与えられる仕事は新人でも出来る雑用もどき……。仕事人間としてのプライドはズダズダだよ」

緒方は自虐的に笑った。

「お辛いですね」

「笑いたければ笑つていよい。人からしたら些細な悩みだからね」

「いえ……、とんでもありません。選択時は何気ないつもりで選んだ選択が後に響く。長い人生に置いてよくある事です。よく話して下さいました」

「え？」

「緒方さん……。あなたの勇気に経緯を評し、これを差し上げます」

唐九汰屋は小さな箱を緒方に差し出した。

「ん？ これは……」

「家に帰つて一人の時に開けてみて下さい。きっと緒方さんに取つてラッキーアイテムになる物が入つております」

「ラッキーアイテム……ね」

やがて緒方の意識が朦朧となる。

マテイー二フ杯も飲めば当然といえば当然か。

やがて、意識が回復したのは自宅の布団の上だった。

頭がガンガンする。動くのが怠い。

典型的な一日酔いだった。

今日は日曜日なため、会社はない。

無いから深酒していたのだけど……。

昨日の服のまま寝ていたといつとは風呂に入っていないといつことだ。

せめてシャワーでもと思い、服を脱げりとした。

ふと違和感に気がつく。

ポケットに何か入っていた。

緒方はそれを取り出した。

「これは確か……」

唐九汰屋とやらから貰ったラッキーアイテムとやら。

小さな手の平サイズの正方形型の箱。

とても軽く、箱の中身は空ではないかと思えるくらいだった。

振っても何の音もない。

とにかく胡散臭い代物といえる。

緒方はなんとなく箱を開封してみた。

中には使い方と書かれている説明書と3枚の単語帳サイズの紙切れが入っていた。

緒方は摘んでその紙切れをまじまじと見る。

ただの画用紙にしか見えない。

説明書を手に取り、軽く読んでみた。

「説明書

この度は、選択紙をご購入戴きましたありがとうございます。」

いや、買つてないから。

と心の中で突つ込みを入れたがなんだか虚しくなったので、続きを読みだ。

「ご購入頂いてごることとは用途を知つてごることで宜

しこと思われますので説明を省かせて頂きます……」

いや、知らないから……。

「等と書いていたら工場長から怒りの鉄拳を喰らいましたので渋々説明をさせていただきます……」

職場内暴力の告発ですか？

「まあ、簡単に言いますと…… 前のとおり選択紙です。ネーミングセансないよね、うちの会社。」

選択紙？

選択肢の誤植か？

とにかく何いきなり馴れ馴れしくなってんの？

こんな説明書初めて見たよ……。

「まあ、当社ご自慢の選択紙……。今なら桐タンスをお付けして……な、なんと驚きの……あつ、もう購入してるんでしたね。」このシーンはカットの方向で

カットされていませんよ。

「Jのテレフォンショッピングですか？」

「どうか、桐タンスの方がおまけつてどつよ？」

「では用途説明に入ります。」

「やつと本題か……。」

「人生には数え切れない程の選択分岐点がござりますよね？ その選択肢を選び、皆様の意図していない不幸が発生しますと選択を間違えた事に対し、不平不満を垂れるのが人間の悲しい性です。ですがやり直しが効かないのが人生。 大半の方は現状を呪いながらも懸命に摸索しながら生きていく。 それが普通です」

「？」

「しかあし！－貴殿はこの選択紙を手に入れました。」

「貴殿！？」

「あなたいつの時代の方ですか？」

「Jの選択紙……、自分が選び直したい選択分岐点を記入するだけで、新たな選択肢を選び直す事が出来る画期的な商品でござります。え？ そんな上手い話があるかつて？ ふつふふ～ん」

ふつふふ～ん？

何この着いていけない三流お笑いタレントが醸し出してこむよつな
自ら満足的ノリ……。

選択紙とやらよつこの説明書を書いてる奴に突つ込みいれるべき？

「まあ、騙されたと思って書いてみたら？　どうせ手元にあるんで
しょ？　いつとくけど、これはクリーニング・オフなんぞきかないから
ね。それとまあ、いちいちくだらない事で密センにかけてくんな
よ？　どうしてもかけたい方はこちらにビード。177番」

……なんかこの番号見覚えあるんだけど……。

天氣予報か！？

「優しいお姉さんが一方的に話しかけてくれるから寂しくないでし
ょ？　はい、説明終わり！　さて、今夜は焼鳥でも食べるか……。
ん？　まだなんか用？　生憎とボクは君に用はないよ。　しつし
つしつ」

え～と……。

とりあえず、なんというか……。

こんな破滅的な説明書初めて読んだよ。

。……。

「つまり、この紙切れに選択し直したい分岐を書けばやり直せる……、といつ」と?」

つい、口に出した。

選択紙の効果を信じた訳ではない。

でも、なんとなくさりげないと書いてみた。

不思議と試してみたくなる効果がこれにはあった。

何も起きないのは当然だし、そんな夢のようなアイテムがあるんなら、俺なら人に譲渡したり、売ったりはしない。

書き終わって数分……、何も起こらず自虐的に俺は笑った。

頭がガンガンと響く。

そうだった……。

俺は一日酔いだった。

「」のまま起きていても気分悪いだけだし、布団の中にでも入って『
ローロしておくか……。

そう思い立ち、再び布団に入る。

布団に入った瞬間……、なんとなく眠気が襲ってきたので眠気に任せ
て惰眠を貪りうとした。

ピココココ、ピココココ……。

いきなり携帯が鳴り出す。

通知は母親と書かれている。

「はい？」

携帯を不機嫌そうに取ると母親が緊迫した声で以下の事を告げた。

「お父さんが事故にあって入院した……」

「また？」

「また？」

「一昨年も事故つて入院したじゃん……」

「は？ 何言つてるのよ、こんな時にー。」

何故か怒られた……。

「鈴木総合病院だからねー！」

そういうて母親は電話を乱暴に切る。

鈴木総合病院つて……、去年かなんかに執刀ミスが発覚してなんだ
かんだで閉鎖したじゃん……とか思つていると何か違和感に気付く。
今、手に持つている携帯だ。

「v o d f o n e」

.....。

一昨年、確かに俺はv o d f o n eを使つていた。

で、ナンバー・ポータビリイとかなんとかで番号そのままで他社に乗り換える事ができるとかいうシステムを使って、こに乗り換えたはずだつた。

「あれ？」

携帯を再び確認する。

電波は三本立つており、通話いつでもできまあよといわんばかりの状態になつてゐる。

日付をみると、親父が倒れた日付になつていた。

「んな馬鹿な……」

たまたま枕元に置いていた週刊の漫画雑誌を手に取る。

今では、すっかり書く気を失せて長期休載を継続している某漫画家の漫画が連載されていた。

しかも走り書きといふか、これ……。

ぶつちやげプロジェクト段階の絵。

よくこんなの載せたな……と作者より出版社に對して呆れた奴だつた。

まさか……。

と思いつつもテレビの電源を付けてみた。

確かに2年前に離婚したはずの芸能人の離婚会見が行われていた。

「…………本物だつたか！」

机の上に単語帳サイズの紙切れが2枚乗っている。

書いた1枚はどこにいったのか、探しても見つからなかつた。

「落ち着け……、落ち着けよ……」

興奮する自分の姿にふと苦笑する。

俺は病院に向かう前に携帯ショップに足を運んだ。

そして支払いを済ませ、病院に向かつた。

「あんた、何してたのー。」

遅い俺の到着に、母親は切れていた。

「あんた、父さんの事、心配じゃないのー!?」

「いや、どうせ助かるし

「なんでそんな事言い切れるのよー!」

忘れていた……。

ここは俺の知る過去であり、俺がもたらす情報に信憑性もクソもないんだった。

あの時も母親は取り乱しており、宥めるのが大変だったっけ……。

まあ、無事と解れば元に戻つたし、放置でいいだろう……。

ピロコン～

メールの着信音……。

やばい……。

病院だった、ここ。

電源切るの忘れていた。

俺はメールを読む。

当時、付き合っていた彼女からだった。

当時？

今は現在か……。

なんか変な感じだ。

「緒方くん、今会える?」

それだけのメール……。

俺は返信した。

「いいよ、どこで会う?」

久しぶりに付き合っている状態の元カノに会える。

そつ胸を弾ませ、何も考えずに返信した。

ヒロヒロの娘とはなんで別れたんだったか……。

思い出して見た。

冷静に、記憶を辿る。

出た結論……。

このメールのシカトだつたな。

当時は父親が生死を迷つていて、彼女ヒロヒロではなかつた。

やがて親父の入院費でお金が無く、この娘の誘いを断つていたら、
気付けば破局したんだつける。

ヒロヒロも何気に分岐があつたじゃないか……。

俺は元カノと別れずに済むかもしれない。

「ちよつと呼ばれた……。……出て来る」

そつ告げる、母親はア然とした。

「な、何言つてゐの……あんた？」

父親は生死の境をさ迷うが、死にはしないし……、なにより俺がいた時代は既に退院している。

俺はそういう結果を知つてゐるからこそでただ無性に医師から話を越したといつ報告を待つより、生産的な行動を選択しただけである。

呆然とする母親をよそに待ち合わせ場所にルンルンと向かつていった。

待ち合わせ場所はファミレス……。

元カノ……。

確か名前は……、上藤早紀さん……。

学生の頃から付き合つた。

「お待たせ」

「「」めんね、呼びだして」

「いじよ……、何？」

「「」の前の事なんだけど……」

「の前？」

「なんだつけ？」

「……うん」

無難な返事。

覚えてないなんて地雷を踏むような事は言わない。

慎重に……つと。

「緒方くんからしたら……、面白く無い話だよね。私も緒方くんの気持ちも考えず軽率だった……。反省していますペコ」と、早紀さんは頭を下げた。

かわいいなあ……。

じゃなくて！

なんのことだ……。

思い出せ、思い出せ……。

……。

ああ！

思い出した。

早紀さんがこの前、違う男と歩いていた所を友人が目撃して……、
その友人が事もあろうにボクに告げ口をしてきたんだっけ……。

で、一方的に俺がぶち切れ、今に至るというわけだ。

結局、俺らは別れて……早紀さんは傷心のまま何故かその友人と付き合い、結婚したって風の噂で聞いたんだ。

今思えば……、友人に嵌められた形になるのかな……。

親父の事が重なっていただけに、結構重要な分岐じゃないか……。

やり直せるつていいな。

「いや……。 結局その男と早紀さんはどんな関係なの？」

「…………弟なの」

「…………」

やつこつわちかい。

よく弾いたら叫びやんの弁明箇をもしなかつたな。

「弟だつたんか…………。 ひつじくれねば…………」

「え、 メールで送つたよ? 話聞いてくれなかつたから…………」

そつこいえば読まざに削除したんだつた。

馬鹿だね、俺…………。

ペコココココ、 ペコココココ…………。

着信
「母」

…………。

峠を越した山の連絡だろ？

だから言つたじやないか、助かるつて……。

「誰？」

「お婆かり…………。出るね

「うそ」

ピ

「はー」

「…………」

「もしもじへー

「父ちゃんが…………」

「ん？」

書類したんだね。

「父ちゃんがたつた今…………」

「え?」

「…………」

「ツ

ツー、ツー、ツー、ツー…………。

「うわ、幽ちゃん?」

「え、ユハつたの?」

「え?…………あ、いや…………。ひさ」

父さんがたつた今、亡くなつたわ…………。
この親不孝者…………。

聞こ聞違いかと思つた。

死んだ？

父さんが？

なんで？

事故で……。

え……。

でも……。

助かつたじゃないか……。

俺のいた時代では……。

医師に峠を越したって……。

なんでこっちでは死んじゃった？

そんな……。

馬鹿な……。

俺、最大級の親不孝者？

そんな。
.....。

だつて俺が来た時代では生きているんだぜ？

卷之二

これは何かの間違い。

もうだよ……。

間違いだ。

だつて俺……。

未来から来たんだ。

だから今から起こる未来の事を知つてゐる……。

峠を越すのが未来の進路だろ。

なんで死んでるんだよ。

「どうしたの？」

我に帰つたのは早紀さん声が聞こえてだった。

「親父が……たつたいま……死んだって……」

それを聞いていた早紀さんは田をパチクリとせざる。

「早く病院に行きなよ」

「あ、うん……。『めんね……』

俺はそういつて、勘定分のお金をテーブルに置き、席を立つた。

そのままタクシーを拾い、鈴木総合病院に向かつ。

いつまでたつても母親から投げ掛けられた

「親不孝者」の言葉が耳から離れなかつた。

ふと、事故の後……

父親の見舞いに行つた時、父親から聞いた話を今頃思い出していた
……。

気が狂つほど自分の身を案じている母親。

それを宥める息子……。

父さん、それ見てこんな所で死ぬわけにはいかないって……。

そう言つていた。

その時は、何言つているんだかとか思つていて取り合わなかつた。

でも、本当に俺や母さんを見ていたとしたら?

病院につき、慌てて俺は中に入る。

俺が着たのを氣付いた母は第一声。

「この親不孝者! 親不孝者親不孝者親不孝者親不孝者親不孝者親不孝者!」

と狂つたように俺を非難する。

それを見た看護士さんが母親を宥めていた。

それからとこりうもの……、家族はぐちやぐちやだった。

連絡を受け、仕事で県外にいた兄は帰省の電車の中で父の死を俺から告げられた。

その後、母から俺の取った行動を兄に告げられ、兄から呆れられて……。

母は母であんたの事絶対許さないと……

こつして俺は家族と疎遠になつた。

こんな結末……、こんな結末を体験するために俺は時代を遡つてきたんじゃない。

ふと氣付く……。

机に選択紙がある。

俺は迷わず、書き込んでいた。

やがて、また携帯の音で目が覚める。

着信
「母」

戻つて来れた……。

すぐ電話を取る。

内容は一緒……。

俺は、すぐ病院に向かつた。

「父さんはー?」

病院に着き、母さんの顔を見た。

「まだ、何も……。 ああ……どうしてこゝんな事に……」

結局、1番最初にいた時代と同じ時を刻んだだけだった。

何も変わらない。

時代を遡つても意味がなかつた。

ただ同じ時を2回繰り返しただけ……。

無駄なことをしてしまった。

やがて最後の一枚の選択紙に気付く。

よへ者えよつ。

どこの分岐に戻れば……ハッピーハンドか。

俺は選択紙にある分岐書き込んだ。

(後書き)

まあ、なんといいますか……。

緒方さんのその後は読者様のご想像にお任せいたします。
決して飽きたから書かない訳ではないですよ。

提督立志伝生き抜きシリーズのミステリーのつもりで書いていたんですけどなんか藤子A先生の笑うなんぢやらみたくなつてしまつてるのはきっとキノセイでしょう……。

ごめんなさい。若干インスファイヤされております。

感想いただけましたら幸いです。

このシリーズ、続きを読むかどうかは反響次第です（汗）

え？ いらない？

汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4533d/>

選択紙

2010年10月28日07時40分発行